

## 自然災害への心意的対応

### — 中国浙江省紹興の水害をめぐる民俗伝承から —

陳志勤 (Chen Zhicun) ※

#### はじめに

本論文は中国江南水郷として著名な紹興において、その水郷風景の形成過程で人びとが水害とどのように闘ってきたのかを、人と水との関わりという視点から考察していきたい。

中国は災害の国といってもよく、その文明史は人間が自然災害と共に生きてきた歴史といっても過言ではない。歴史上、自然災害は絶え間なく発生し、人々は完全にそれから逃れることはできなかった。現代社会においても、異常気象、環境破壊、人口爆発などの要因による災害は引き続き中国を襲っており、さらにそれは、規模を拡大している。全自然災害に占める中規模以上の災害の頻度は、50年代には12.5%、60年代には42.9%、70年代には60%、80年代には70%、90年代には100%になった(胡鞍鋼 2001:108-109)。特に1998年の大洪水は、中国水利部の発表によると、全国29の省・自治区・直轄市がこの大洪水で被害を受けて、農地の損害面積は2229万ヘクタール、被災面積は1378ヘクタール、死者4150人、喪失家屋685万戸、直接経済損失額2551億元ということであった(中華人民共和国水利部 1999)。その結果、各界に議論と反省を促しているが、歴史上の自然災害への対応・経験を振り返りつつ、歴史の教訓を学ぼうという動きも見られようになった。

中国の正史はかなりのスペースを災害の記録に費やしている。中国における災害に関する具体的研究は1920、30年代から始まったといわれている。中国の災害史研究において一大画期となる、1935年に出版された鄧雲特の『中国救荒史』はその代表である。同書の注目すべき点は、災害に対する民衆の対応として、巫術や祭祀儀礼による災害除去を一つの心意的対応と見ている点である。鄧雲特は、このような民衆の災害除去策としての巫術・祭祀儀礼が、現代社会においても絶えず行われており、科学的な救災活動と同時に実施されているとして、心意的対応の現実的意義を論じている。中国の歴史学界や日本の東洋史学界では、主に朝廷の荒政や郷紳の救荒策など、支配者層あるいはエリート層の問題に注目しており、その研究蓄積は膨大である。しかしながら、民衆の立場に立ってそのあり方を解明する研究は進められてこなかった。

自然災害及び環境問題への反省に伴って、人と自然との関わりがもう一度見直されつつある昨今、地域住民の視点が重要視される中で、民間伝承に見られる信仰・儀礼などの心意的対応及びその現実性は、ふたたび認識されるべきであろう。野本寛一は、災害にまつわる民間伝承を人と自然との関わりの一つと考え、その研究方法について次のように論じている(野本1996:6)。

---

※日本学術振興会外国人特別研究員

環境に対する人の対応には即物的対応と心意的対応とがある。たとえば、河川氾濫という環境現象に注目してみると、氾濫を防止するための築堤のごとき土木的・即物的対応と、河川氾濫の原因となる降雨量を事前に占ったり、台風鎮静を祈ったりする信仰的・心意的対応とがある。環境民俗の研究対象はこの両者であり、特に後者にまで及ぶところに環境にかかわる民俗学の特色があるといえよう。

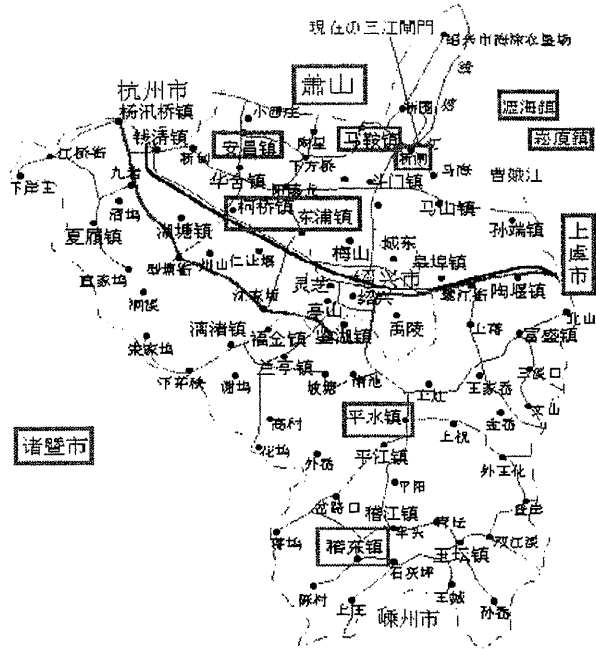
言うまでもなく、このような心意的対応では自然災害を防止するはできない。しかしながら、中国においては、信仰・儀礼が、経済発展とともに復活しており、それを理解するためにも、かつての自然災害への心意的対応を人と自然との関わりという視点から、今一度見直す価値があるであろう。

中国では1998年の大洪水をきっかけとし、1935年の『中国救荒史』が再版され、歴史学のみならず、民俗学、社会学においても多岐にわたる災害に関する研究成果が発表され、民衆の自然災害への対応を解明しようとしている<sup>1</sup>。これらの論考は、歴史文献を基本として地域の個性や災害の種類を問わず、中国全体を対象とするものがほとんどである。また、災害時の民衆のあり方に注目したものの、国家の歴史・社会における民間社会の変動として捉え、地域社会における民衆の具体像が見えてこない。そこで、本論は人びとが災害に対してどのようにイメージしてきたのか、どのような心意的対応が行われてきたのかという問題を、紹興という地域社会における潮による水害の伝承に焦点をあてて論ずるものである。

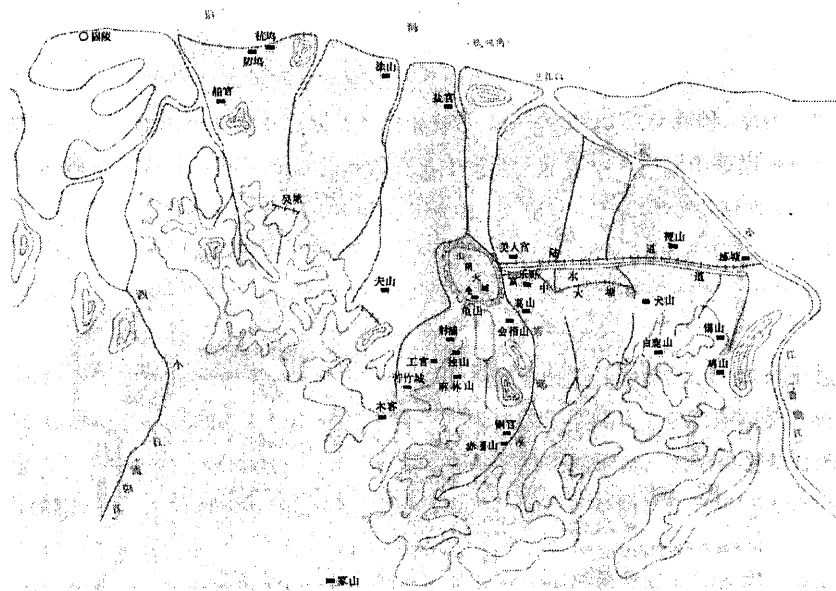
## 一. 調査地の概況<sup>2</sup>

紹興は、長江下流の杭州湾の南岸、浙江省中北部の杭甬（杭州と寧波）の間に位置し、古くから「魚米の郷・文化の邦」と言われる著名な江南水郷でもある（図1）。現在の紹興古城は、春秋時代の越の王勾踐が紀元前489年に造った「勾踐小城」、及びその後「勾踐小城」から拡大した「山陰大城」を基礎として形成され、発展してきた（図2）。清の光緒期(1875～1908年)、紹興古城には、全長60キロの33本の川で229座の石橋が架かり、総面積35ヘクタールの大小27カ所の湖や池が点在し、九つの城門のうち七つが水の城門になっていた（紹興市地方志編纂委員会1996:377）。18世紀末期、フランス宣教師Groslerは紹興の自然風景について、「豊かな平原で水に囲まれたベニスのようなところである」と描写している<sup>3</sup>。現在は、古城の面積の約10%をクリークや運河が占めている。至るところに小河や溪流が縦横に走り、水路を進む船の姿が絶えず、兩岸を結ぶ石橋や川に沿う古い民家が昔の姿を語り続けている。改革開放以後、かつての面影は消えつつあるが、水郷の人々が馴染んでいる「小橋・流水・人家」のような景観は、水郷風景の象徴として現在も残っている。

現在、水郷風景が広がっている紹興中部の山会平原（山陰・会稽平原）は、もともと沼沢地であった。春秋時代の紹興は、南部には会稽山群が聳え、北部は杭州湾（地元では後海と呼ばれる）を望み、東部は東小江（現在の曹娥江）に沿い、中間部は沼沢平原（山会平原）が広が



(图1:紹興地図)

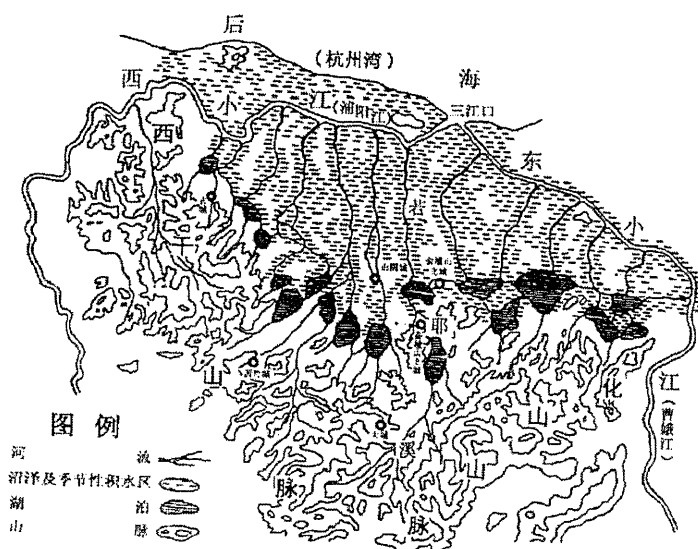


(图2:春秋時代の紹興城)

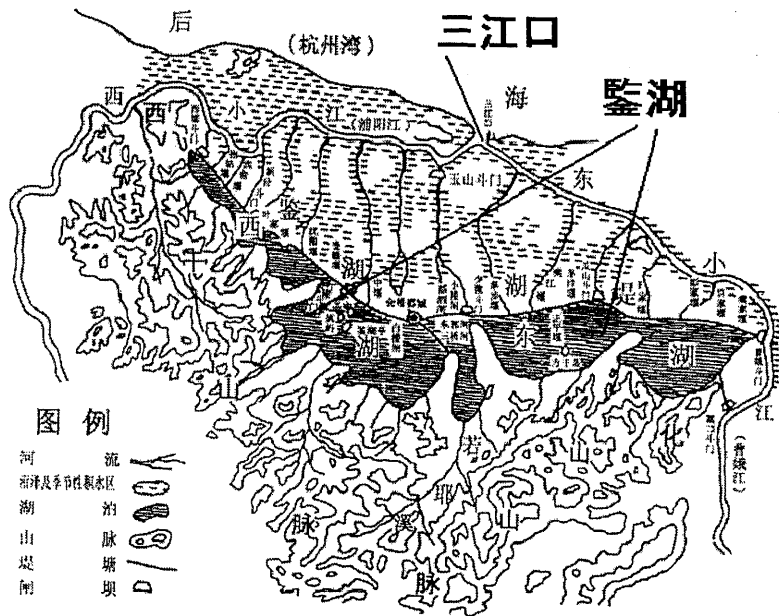
る、「山一原一海」という階段式の地形が形成されていた（陳鵬兎他 1991:113）。南部山地からの洪水と北部杭州湾からの潮汐が中間部の平原を襲い、土地の沼沢化が進み、土壤の塩化が深刻であった。春秋時代の齊の名宰相管仲の「越国の水は濁ってよどんでおり、故に越の民は極めて愚かで垢染んでいる」（「越之水重濁而泊，故其民愚極而垢」）という言葉は、まさにその時期の水環境をあらわしているものである<sup>4</sup>。越国は塩化した沼沢地を開拓しなければならなかったのである。

春秋時代から秦の時代、漢の時代に至るまで、開拓の進展と農業の発展とともに平原地帯では堤防が数多く造られてきた。その結果として、後漢時代（25～220年）になると、ついに大規模の堤防造りが始まった。それは鑑湖の水利工事である。後漢永和五年（140年）、会稽県の大守である馬臻が、南部山地からの洪水と北部の杭州湾からの潮汐を防ぐため、江南地域の開発史において名声の残る画期的な灌漑設備＝鑑湖を造り上げた（図3、図4）。鑑湖の貯水力と山洪水の防止機能によって、沼沢地の農業開発が可能となった。しかし、沼沢地は鑑湖の北部にあるので、北部杭州湾からの潮の被害を防ぐことは、依然としてできなかった。また、北宋曾鞏の『越州鑑湖図序』によれば、宋真宗の大中・祥符時代（1010年前後頃）から鑑湖を埋めて田にするいわば「盗湖為田」が始まり、宋英宗の治平時代（1064年）になると、鑑湖は開拓されて殆んど水田になってしまった。その後、鑑湖を復活させるか廃棄するかという議論は紹興水利史上における議論の的であったが、結局、鑑湖の機能を復活することはできなかった。

後漢時代以来、高潮の未然防止と淡水の蓄積のため、沿海部においては防波堤造りと河川の



（図3:後漢永和時代以前の紹興水系）



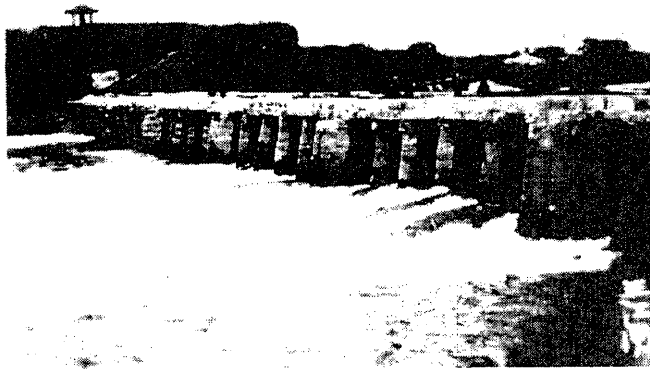
(図4:鑿湖完成した後の紹興水系)

整備が進んできたが、文献による記録は少なく、文献で確認することができるのは、唐の時代(618~907年)から始まった大規模な防波堤造りである。宋の時代(960~1279年)になると、防波堤は完成され、内水河川や湖も形成されたということである(車越喬他 2001:128, 131)。

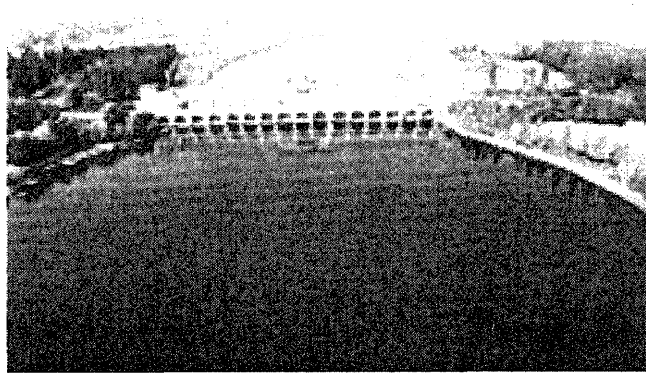
しかし、沿海部における防波堤は整ったが、北部の三江口からの潮の被害という問題は未解決のままであった。それが、明の嘉靖16年(1537年)に至ると、紹興府の知府である湯紹恩によって、三江口に三江閘門が建造されたことによって、ついに解決された。この三江閘門は、その後何回も建て直され、現在でも紹興の水環境を守る重要な水利設備となっている(写真1, 写真2)。

以上述べたように、紹興北部にある杭州湾の潮による水害との闘いは、紹興地域開発における重大事であった。それゆえこの地には、多くの潮の被害に関する伝承が伝えられてきた。水利開発により、「後海」と呼ばれる杭州湾に面する紹興の沿海部は、次第に優れた水郷風景を形成し、海に関わった面影はもう残っていない。地域の人びとが潮による水害とたたかった歴史も忘れられている。

都市化や近代化によって稲作が激減し、漁業は専ら養殖となり水運が必要とされなくなったことにより、海や川に頼ってきた暮らしは失われた。紹興北部にある柯橋鎮、安昌鎮、東浦鎮をはじめ、かつて、水に恵まれ水運が発達してきた「江南商業大鎮」は、現在、「江南水郷古鎮」



(写真 1:1930年の三江閘門)



(写真 2:現在の三江閘門)

として、伝統文化を活用する観光開発が進んできている。その中で、忘れられている人と水との関わりの民俗を、地域社会の伝統文化として復元し記述することの重要性は認識されるべきであろう。

次に、まず伝説による作られた潮の被害のイメージを確認し、そして、このような被害に対して、紹興の人びとの心意的対応を、水神信仰という具体的な行動と人身御供という事例から考察していきたい。

## 二. 伝説に見られる潮汐のイメージ

紹興の北部、上虞の西北部に位置している滙海鎮は杭州湾に臨んでおり、明代から海防の要

衝であった。宋代から瀝海鎮を設置し、明代では瀝海所という海防の機関が設けられていた。瀝海鎮は古くから干潟を干拓した地方であり、現在、その三面は浙東海塘という防波堤に囲まれている。

瀝海の周辺では、瀝海という地名の由来に関する伝説を伝承しており、この伝説の中に東京という城の名前が登場している。いまでも、遠い昔、ここに東京という賑やかな城があったと伝えている。「瀝海」伝説<sup>5</sup>の概要は以下の通りである（紹興市民間文学集成辦公室 1989:上517-518）。

いつの時代かは不明だが、仙人の呂純陽さん（呂洞賓のこと）が人間の心を試すために白髪の老人に変身し、東京城へやってきた。彼は大きな声を上げながら街で油を売り歩いた。彼はお金のことを気にせず、お客が持ってきた入れ物に油をいっぱいまで入れてあげた。そのため、彼の油を買いに来る人はますます増えた。ある日、一人の男の子が油を買って家に戻ると、母親は油でいっぱいになった瓶を見て、どうして一枚の銅貨だけでこんなに多くの油が買えたのかと不思議に思い、「余った油を早く老人に返してあげなさい」と息子に告げた。

老人はこの母子は本当に誠実な人間だと思って、手元から二足の草鞋を取り出し、「ここはすぐ災害が起きるから、あの廟の前に石獅子の口から血が出てきたら、この草鞋を履いてあなたのお母さんを背負って逃げなさい」と息子に言い聞かせた。

その後、息子は毎朝、石獅子の口から血がでていのかどうか確認した。廟の前で豚肉を売っている人はこの事情を聞いて、ある日、いたずらでわざと豚の血を石獅子の口に塗りつけた。息子は石獅子の口から本当に血が出ていると思い、すぐに家に戻りあの草鞋を履いて、母を背中に負いながら南へ逃げ出した。豚肉を売る人もわけがわからないが、とりあえず後ろについてきた。

彼が大股で走り出したとたん、水が足元から湧き出してきて、地面も陥没しはじめた。そして、彼が早く走れば走るほど、水も追いかけてくるように早くついてくるのである。しばらくして、大変疲れてきた母子はあるところで一息をついて、また走り出した。そして最後に力を失い、仕方なく走るのをやめた。すると、水もそこで止まって退いていったのである。しかし、彼らが住んでいた東京城は果てしなく広がる海となった。逃げ出した人は母子とついてきた豚肉屋さんの三人だけであった。

その後、地元の人々は一息ついたところを「松下」（「松」は息を抜くということを意味している）、走りをやめたところを「立海」（「立」は停止するということを意味している）と名づけた。「松下」は現在の嵯虞鎮、「立海」は現在の瀝海鎮であるという。

油をいっぱい欲しがっていた欲望に溢れる東京城の住民がすべて遭難し、誠実な母子だけが救われた、という「瀝海」伝説は、人間の墮落と災害の原因が付会して語られている。同様に、紹興の伝説では、東海にある龍王もしばしば大潮の原因となっている。例えば、「梅梁と梅龍橋」の伝説もそうである（紹興市民間文学集成辦公室 1989:上347-348）。

また、満ち潮の神とされている春秋時代の伍子胥が復讐のために、高潮を起こしたという伝説もある。伝説によると、伍子胥の復讐は二つの形で伝わっている。一つは「満ち潮の神と引き潮の神」伝説のように、満ち潮の神である伍子胥による引き潮の神である文種に対する復讐である（紹興市民間文学集成辦公室 1989:上72-74）。いまひとつは「三江口放水灯」（三江口の灯籠流し）伝説で語られているように、文種と共に呉国を滅亡させたとされている越国の美人の西施に対する、満ち潮の神の伍子胥の復讐である（紹興市民間文学集成辦公室 1989:上572-575）。西施は四大美女の一人であり、紹興南部山地に隣接した諸暨の人間である。ここでの三江口は上述した紹興北部にある三江口ではなく、諸暨にある三つの川の合流点である。この伝説は諸暨の三江口で灯籠流しをしないと、伍子胥が西施に復讐するために、諸暨地方が高潮で沈没する恐れがあると伝えている。

「瀝海」伝説は海水が陸地へ上がる様子も描いている。海水が人間の足もとを追い駆けるように陸地上がるという災害は、現在、防波堤に囲まれた海辺の人間には非現実的なものとなっているが、伝説にはそのイメージがとどめられている。

同様のイメージをとどめるものに、遠い昔、一面の海から紹興という城が出てくるという伝説がある。紹興の南部山地では「坍東京長紹興」（東京が崩れ紹興が生まれた）という言い伝えがあり、この東京は、現在の瀝海のあたりにあったと言われている。この言い伝えは「沉東京長紹興」（東京が沈没し紹興が出てきた）ともいい、「瀝海」伝説とは別の形で南部山地のあたりで伝承されている。南部山地にある稽東鎮六岸村での聞き取りによると、言い伝えは以下のような内容である。「昔の紹興地方は一面の海が広がっており、海辺には東京という城があった。ある日、東海の高龍王が寝返りを打った。すると、東京城はそのまま沈んで、紹興地方が海から生まれ出て来たのである」。

伝説は歴史事実ではない。しかしながら、沼沢地から開拓された紹興地方の歴史と対照すると、海辺の「瀝海」伝説と山地の「沉東京長紹興」の言い伝えには二つのイメージが投影されている。一つは、南部の山間部と北部の海辺とは直接つながっていた。すなわち、紹興の中部平原がまだ開拓されていなかったイメージであり、もう一つは高潮が南部の山地にまで到達したというイメージである。

このようなイメージ化された記憶は「平水」という地名の由来からもうかがえる。南部山地に平水（現在の平水鎮）という地名があり、海が広がっていた昔は潮汐が山地にまで進んできて、ちょうど現在の平水鎮のあたりに止まったということから、そこを平水と名付けたという。

平水鎮にある雲門寺は紹興の名刹であり、紹興には雲門寺の僧侶は特異な能力を持っているという伝承がある。「雲門僧の故事」には潮汐に関するものが二つある（紹興県民間文学集成工作小組 1989:38-39）。その一つは、雲門寺僧侶が東海の高龍王に、満ち潮が来る前に必ず知らせてくれるようにと命じたという話である。満ち潮が来ると大きい音を立てるのは、高龍王が雲門寺の僧侶に知らせている合図であるという。もう一つは、雲門寺の僧侶が会稽山の土を掘り、この土を曹娥江と錢塘江の合流点へ持って行って防波堤を造ろうと思ったが、潮水が彼の力を恐



れ、先に引いていたため、担いできた土を合流点のところでおろし、それがそのまま山になったという話である。潮による水害に悩んでいた人々は、高潮を起こした東海龍王とたたかう能力をもつ雲門寺僧侶のイメージを作り出したのである。

潮に関する伝説や故事からは北部の海辺だけではなく、南部の山間部ともつながるものが多いことがわかる。現在、北部の海辺と南部の山地の間に水郷平原が広がっているのだから、北部の海からの高潮が南部の山地にまで来ていたことなど誰も想像しえないであろう。

平水という地名については、北部の海水の上陸がちょうどこのあたりに止まったことに由来すると既に紹介した。山間部の若耶溪の周辺で伝えられている「若耶溪洪水」の話によると、平水のあたりはまた山の洪水が止まったところでもあるという（邱志栄 2002:171）。

若耶溪の周辺では連続する暴雨により洪水が起り、年老いた母と少年の二人は走るのが遅くて、洪水に襲われそうになった。ちょうどその時、一人の仙人があらわれた。仙人は母を連れてくる少年の親孝行に感動し、母親を背負って平水のあたりまで行けば、洪水から逃れられると少年に教えてあげた。少年は仙人の教えに従って一所懸命母を背負って平水の方向へ走り、二人は洪水の災害から逃れることができた。

「若耶溪洪水」の話は、先に紹介した海辺の「瀝海」伝説と同じモチーフである。水による被害は水の速さに特徴があるので、伝説のなかでは水が人間の足もとを追い駆けるという様子が描かれていることが多い。そして、水の速さを鮮明に対照するために、行動が遅い老婦人が常に登場している。若耶溪の周辺は洪水が起りやすいところであって、平水地方以南は洪水の被害がひどかった、という話が古くから伝わっている。「若耶溪洪水」の話はちょうどこのような水害の様相を描いているという説がある（邱志栄 2002:170-171）。しかし、若耶溪はかつて杭州湾の潮汐に影響にされた川であった。後漢時代の王充（25-97年）の『論衡・書虚編』には、「浙江（現在の钱塘江）、山陰江（現在の若耶溪）、上虞江（現在の曹娥江）は皆、涛がある」と記されている。地理学者陳橋驛によると、この「涛」は杭州湾の逆流であると解釈できるといふ（陳橋驛 1999:145）。従って、「若耶溪洪水」の話は潮による水害の可能性もある。

### 三. 三江口における心意的対応

日本の水郷である柳川では、治水に貢献した地方官を水神として祀る話がある。現在の柳川の水利システムをほぼ整え、治水や干拓に力を注いだ藩主田中吉政のことを、「水神さま」と呼んでいる。富山和子は「いわゆる水神信仰の水神さまならともかく、江戸時代の治水家までを「水神さま」と呼ぶその呼びかたに、土地の農民の心を知らされる思いであった」と述べた（富山 1987:119）。水郷紹興にも柳川と同様、地方官から治水家へそして治水家から水神へと変身した話が存在する。これは明の湯紹恩に関する話であるが、彼が建造した三江閘門という水利設備によって、水郷紹興における現在の水環境の基礎が形成されたのである。

## 1) 閘門づくりの人物から水神へ

紹興の治水といえば、鑿湖をまずあげなければならない。鑿湖は後漢時代の永和五年（140年）、会稽太守の馬臻（字は叔薦、山陰の人間である）が建造したもので、紹興の開発において画期的な灌漑設備であった。鑿湖は長江以南で最初かつ最大の水利設備であり、江南地域における水利開発の先駆けとなったものでもある。鑿湖は山陰・会稽両県に跨り、周囲が360里（1里は500メートルで、180キロ）、堤防が130里余り（56・5キロ）、9千頃（1頃約6.7ヘクタール）の水田を灌漑する「鑿湖八百里」と称された大型ダムであった<sup>6</sup>。

鑿湖が南部の山地と北部の海辺との間の中部平原で造られたので、紹興の地形は南から北へ、山地→鑿湖→水田→後海（杭州湾）という形になった（図4を参照）。鑿湖の建造は堤防工事及び排水・灌漑の工事を中心に行われた。周囲360里の鑿湖が南部山地からの36本の河川の水を集めるように造られ、130里の堤防にはたくさんの排水・灌漑の設備が設置された。歴代の設備の数には増減があり、当初排水・灌漑の設備がどのくらい作られていたのかは記録されていない。北魏の『水経注・漸江水』によると水門は69箇所とある<sup>7</sup>。また、北宋曾鞏の『越州鑿湖図序』には暗渠が33箇所あり、南宋徐次鐸の『復鑿湖議』には、斗門（水田に水を入れる小型の水門）が8箇所、閘（大きい水門）が7箇所、堰が28箇所あると記録されている<sup>8</sup>。鑿湖は水田より3.3メートルあまり高く、水田は海より3.3メートルあまり高い。そうすると、水不足の時には鑿湖の水を引いて水田に注ぎ、水が氾濫する時には鑿湖の水門を閉めて水田の水を海に流すことができた。

鑿湖ができてから、紹興中部平原の灌漑、排水の問題は解決された。それに、南部山地からの洪水を防ぎ、北部の塩化した農地へ淡水をもたらすなどの効果もあった。また、鑿湖の建造は灌漑水利の面での利点だけではなく、水利学者姚漢源が述べたように、「もう一つの側面の水利」（姚漢源 1991:1）という意義も有している。すなわち、水には自然景観を美化する役割がある。

宋代以来、鑿湖を埋めて田にしたことによって、鑿湖は小さくなりその機能がはたせなくなってしまった。そのため、紹興の水環境はまた深刻な状態になった。明代になると、農地の灌漑問題を解決するために、紹興は水利開発の必要に迫られた。その中で、三江閘門の建造は浦陽江の川筋変更及び麻溪壩の修造とならんで、鑿湖が廃棄された後の紹興の水環境を取り戻すための重大事となった（陳橋驛 1999:248）。

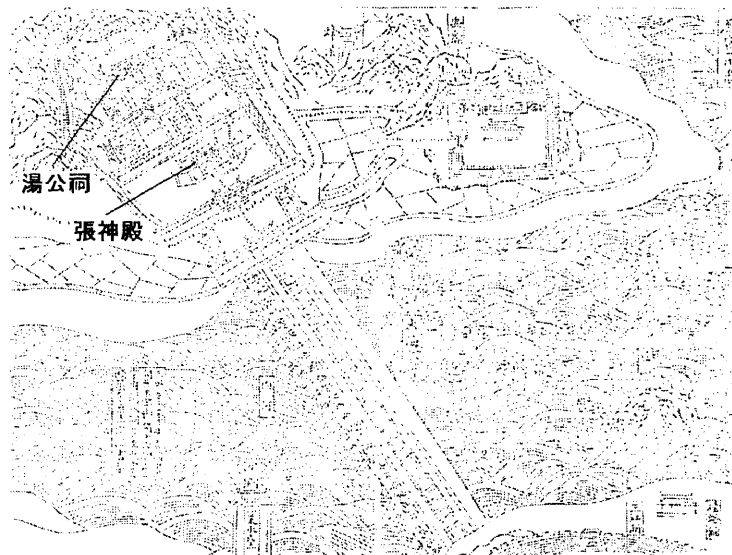
中部平原の農業開発には一つの問題があった。これは北部の海からの潮汐を防ぐことが以前から解決されていなかったということである。『水経注・漸江水』によると、東晋成帝の時代（およそ330年）、鑿湖の北部ではイカなどの海の生物がよく捕られており、そこが海に繋がっていたことを裏付けている（車越僑他 2001:125）<sup>9</sup>。『呉越錢氏志』（下函卷五）によれば、唐の末期、紹興で井戸掘りをすると、出てきた水はまだ塩分濃度が高かったという。水田はいったん潮水を受けたら、数年回復しないといわれる。海に面した北部平原の塩分を薄くするためには、潮汐の影響を受けている河川を整えなければならなかった。

明の嘉靖14年（1535年）、四川省の人である湯紹恩が紹興の知府になった。彼はこの問題を解

決しようと思ひ、紹興の水路を調べた。そして、内河と外海との接点である三江口に目を止めて、三江口に閘門を造ろうとした。また、清・梅堂老人の『越中雜識』には、三江口に行った湯紹恩は、兩岸にある二つの山が向かい合つてそばだっているのを見て、川の底に必ず石のつけ根があると考え、ここに水門の建造を決めたという話がある（梅堂老人 1983:50）。

三江口は紹興の一番北に位置する入江口であり、東西にある南部山地からの東小江（曹娥江）、西小江（浦陽江、銭清江を通して海に注ぐ）、そして北部の杭州湾という三つの水路が合流するところである（図4を参照）。三江閘の工事は1536年7月から始まり、約九ヶ月後に完成した。三江閘は計28個の空洞からなり、それぞれ星の名前に対応して命名されたので、最初「応宿閘」と呼ばれていた。

湯紹恩に関する伝説は多い。たとえば、紹興にこんな話がある<sup>10</sup>。湯紹恩は安岳（四川）の人であり、彼が生まれる時に母親は夢で神を見た。夢の中の神は自分が紹興の城隍神であると言う。そのあと、湯紹恩が生まれた。生まれた後、命名のことをお坊さんに尋ねた。お坊さんは名前の中に紹という字を入れたほうがよい、将来、彼の恩を受けた東方に住んでいる者が出てくると言った。そして、彼を湯紹恩と名付けた。その後、湯紹恩は本当に紹興の知府となった。三江閘を建造する時、高潮が閘門に激しくぶつかるため完成させることができなかった。彼は神を祀って「閘門を完成させなければ、自分の身を海に投げよう」と誓った。ある日、数千頭の大魚が高潮に乗ってやってきたが、造り上げた閘門を恐れ止まった。その後、高潮が一ヶ月おこらなかったので、三江閘は遂に完成した。紹興の人びとは湯紹恩に恩を感じ、三江閘近くに湯公祠を作った<sup>11</sup>（図5）。



(図5:三江閘門の傍らにある湯公祠)

この話は、紹興の人びとが四川の人間である湯紹恩に、自分の土地を守る神になってほしいため、作ったものであると考えられる。湯紹恩が海に身を投げようとするのは、一種の人身御供のような話ととらえることもできる。しかし、実際は湯紹恩の身代わりになった人がいた。それは湯紹恩の下の役人で莫隆という人である。

『越中雑識』に、次のような伝説がある(悔堂老人 1983:21)。莫隆は工事現場の監督で、ある日、閘門の底をチェックした時、巨大な石に押さえつけられ死んでしまった。三江閘が完成した後、湯紹恩は閘門のそばに「三江司閘正神廟」を造り、莫隆を閘門を司る神として祭ることにした。そして、次の話は閘門を司る神への深い信仰の様相を語っている。閘門ができてから長い年月が経つと、閘門が海から運んできた泥や砂で詰まり、百人千人の力でさえ開くことができなくなった。たとえ、閘門を開くことができたとしても、詰まっている泥や砂が高潮で激しく流れてくる。このような事態になっても莫隆の廟で彼に祈ると、ゆっくりと水が流れ、更に閘門もすぐに開いたという。

また、清・陶元藻の『広会稽風俗賦並序』は別の話を紹介している(悔堂老人 1983:221)。湯紹恩は三江閘を造る時、閘門の中部の空洞がどうしてもできなかった。その時、神が湯紹恩の夢の中に現れ、彼に「木龍の血を獲得したら、完成することができる」と告げた。ちょうど湯紹恩の部下である莫隆(紹興の方言で木龍の発音は莫隆と同じ)は命令を受け工事現場の視察に行った。閘門中部の空洞に着くと、足を踏み外し水に落ちて死亡した。そして、彼の血が石についたことで、工事も成し遂げることができた。その後、湯公祠を造る時に彼の像も安置され、毎年、地方官らは湯紹恩を祭る際に必ず莫隆をも参拝する。参拝すると水の流れがよくなり、参拝しないと閘門を開いても水が流れてこないという。

この「莫公祠」は先に言及した「三江司閘正神廟」と同一かどうかかわからない。かつて、三江閘の西側に「双濟祠」があった(張能耿他 1995:365-366)。双濟は次に紹介する張神と湯紹恩のことを指していて、「双濟祠」は前部の「張神殿」と後部の「湯公祠」からなっている(図5を参照)。また、後部にある「湯公祠」は中庭が三つある建物であり、真ん中が正殿で湯紹恩を祭っているが、正殿の後ろが「莫公祠」(莫隆を祭るところ)になっている。

上記の三つの話からは人身御供の形が整っていることがわかる。地方文献のこのような話に対し、民間社会に記憶された人身御供とはどのようなものだろうか。木龍の血というモチーフが登場する物語がもう一つある。これは今まで地方文献には記録がなく、三江口の周辺で伝承されているものである。

北部にある馬鞍鎮湖山村での聞き取りによると、その内容は次の通りである。三江閘の建造が難航していて、高潮が激しいため閘門の両端がどうしてもつながらなかった。そこで、先の話と同じように、神が湯紹恩の夢の中に現れ、彼に「木龍の血を獲得したら完成することができる」と教えた。「龍の血はともかく、木の龍の血はどこから手に入れるのだろう」と、湯紹恩はずいぶん悩んだ。そして、ある日、三江口の近くにある村の男の子が外で遊んでいて、食事

の時間になると、男の子の母親が「木龍、木龍、どこにいるの、ご飯だよ」と、彼を呼んでいる。この子の名前が本当にその「木龍」なのかかわからないが、男の子の母親の呼び声はそう聞こえてしまった。湯紹恩にもこのように聞こえた。彼はすぐ夢の中に出てきた神の話を思い出し、「木龍というのはこの子のことだろうか」とひらめいた。その時、ちょうど工事用の石が崩れてこの子が倒れてきた石によって死んでしまった。工事をしていた人はそのまま男の子を三江口へ押し出した。すると、激しい高潮が止まって、三江閘の工事は無事に完成した。そのほかに、生きている男の子が三江口に投げられたとか、湯紹恩がこのようにしたとか、さまざまな言い伝えがあるようである。

これらの話からは、高潮に悩まされ続けてきた人々の間に伝えられてきた人身御供の様相がうかがえる。三江閘が完成してからは高潮の影響が少なくなったため、紹興北部平原の塩分も薄くなっていき、農業生産は向上した。湯公祠と三江司閘正神廟には湯紹恩と莫隆が祀られているが、民間では祭祀は執り行われていないようである。その一方で、公的祭祀はよく行われていた。『越中雜識』には「有司春秋祭」とあり、春と秋に公的祭祀があると記録している（梅堂老人 1983:30）。そのほかに、毎年旧暦の8月18日の「観潮節」に、地元の官僚たちは湯公祠で公式的に湯紹恩を祀っていたという（張能耿他 1995:347）。三江口で逆流する高潮の暴れる様子を観覧することを紹興では「三江観潮」といい、現在、人気の観光スポットとなっている。

## 2) 防波堤づくりの人物から水神へ

湯紹恩は地方官僚であり、また、三江閘門の工事は地方政府が主導して造られたものである。それゆえ、彼への祭祀はその後の地方官が主催していた。それに対して、紹興の人びとは自分たちが祭祀を行なうことができる廟を造った。それは船乗りや水上生活者に祭られている廟、張神廟である。清の『康熙会稽県志』と民国の『越祠紀略』によると、張神は名は夏、蕭山の長山の人とある<sup>12</sup>。宋の時代、防波堤（紹興では海塘という）が崩壊すると、張夏は修繕に力を尽くし、その功績で年貢米の運送を司る官（漕運官）となった。後に、米を運送する時、川の決壊で船が転覆し、張夏は行方不明になった。次の日に、一匹の大亀が張夏の死体を乗せ砂地に浮かんできた。その時、傍にいる巫術者は彼がすでに神になったと皆に言った。その後、人々は彼の死体を蕭山長山に埋葬し、神として彼を祀る廟も立てられた。

紹興では張夏を張神（張老相公ともいう）として祀る張神廟や張神殿が多く存在し、特に水上生活者に信仰心されている。年貢米を運送する漕運官は当然船や水域と密接な関わりをもっており、いわば水上生活者でもある。この関連で、水上生活者は彼を舟運の神として信仰したのかもしれない。

彼の死は治水と関係なく水害によるものであるが、上記の話と同じく人身御供の形になっている。紹興に隣接した蕭山も人身御供のような話が多いようである。蕭山にある「西江塘」という防波堤は、銭塘江に面している山陰・会稽・蕭山の三県を守っている。この防波堤には「股堰」という堰があり、これに関して次のような話がある<sup>13</sup>。元の時代、その堰が決壊した。堰は

何度造っても崩れたため、工事はその繰り返しだった。工事現場で働いているある人の妻が夫に苦勞をさせないように、自分の太ももの肉をえぐりとして、崩れたところに投げ込んだ。すると神は彼女の誠意に感じて、工事を助けてくれて「股堰」は完成したという。

しかしながら、上述したように、張夏が漕運官になったきっかけは治水と関わりがあった。蕭山は紹興県の西北部に位置し、隋唐時代に越州を設置して以来1949年まで、紹興地方の行政に属する県である。両県は同じ杭州湾に面していることで、高潮の被害を防ぐため連携が強かった。先に「湯公祠」を紹介した時、「双濟祠」に言及したが、「双濟祠」の前部にある「張神殿」はまさにこの張夏を祀る廟である（図5を参照）。紹興の三江口における治水にまつわる湯紹恩・莫隆と並んで祀られているのは、潮による被害の防止との関係があるためである。要するに、張神は舟運にまつわる神であるのみならず、潮の被害や三江口の治水にも関係している。それゆえに、張夏は「雲徳海潮王」という名も有している（阮慶祥他 1985:178）。

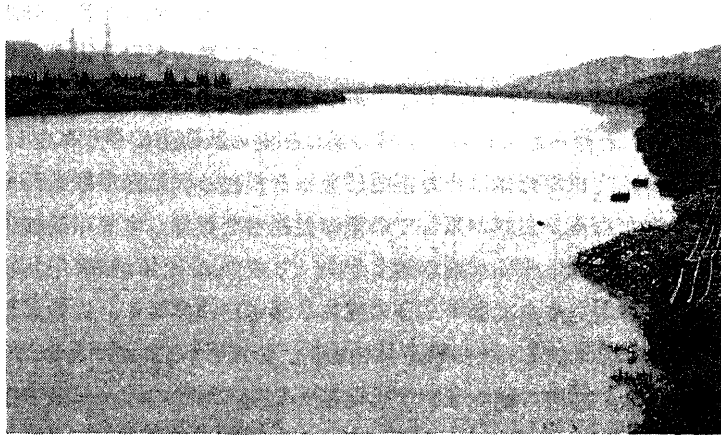
昔、船頭を中心とする水上生活者が舟運の安全を保つために、張神を祀って毎年旧暦の3月6日彼の誕生日に、演劇と龍舟競争を中心とする祭りを行った。しかしその後、張神は財神の性格をもつようになった。新年になると、水上生活者だけではなく商売をやっている人たちも、金銭運に恵まれるようにと張神廟で張神を祭るようになった（紹興文聯 1997:299）。その由来は「張神像が財神殿に置かれたことがある」という老人の話からうかがえる（阮慶祥他 1985:178）。船頭たちは財神殿に安置されている張神像を、財神像として参拝した可能性がある<sup>14</sup>。加えてその背景に、水利開発によって水害が少なくなったことや、船を中心とした交通手段が変わってきたことが挙げられる。いずれにしても、この地方の水神信仰の時代の流れによる変遷を見ることができる。

既に紹介した明代の湯紹恩、莫隆、そして宋代の張夏は、治水と関係して治水の水神というイメージが強く、しかも何れも紹興北部における三江口閘門や防波堤の建造と関わっていたので、高潮を防ぐ潮の神という性格も持っている。

#### 四. 曹娥江における心意的対応

既に紹介した伍子胥については、以下のような説がある。潮神としての伍子胥の祭祀は杭州湾以北に限って行われていて、寧紹平原（寧波と紹興）の民間社会においては潮神としての伍子胥信仰がないという。越国の紹興地方では、自分たちに復讐する伍子胥は受け入れられなかったためであるという（王水 1995:119）。しかし、紹興地方には決して潮神の信仰がないのではない。それは、曹娥江で伍子胥神を迎え、彼の霊を鎮魂するという曹娥伝説によって知ることができる。

曹娥江は浙江省における暴れ河であり、古来幾度となく高潮の氾濫を繰り返した（写真3）。曹娥江周辺の言い伝えに、「沿海に住む人は苦しんで、潮の音が聞こえるだけで胸が痛くなり、年々家を作っても、この土地から逃げなくてはならず、まるで飛んでいる鳥のようである」とい



(写真3:現在の曹娥江)

われるように、高潮による被害はひどく、人びとの暮らしは安定していなかったのである。そのため、伍子胥の霊を慰め、荒ぶる高潮を鎮めるための祈りを必要としていた。伍子胥と曹娥をめぐる信仰の背景には、人身御供という要素も見られる。

#### 1) 文種と伍子胥の民俗伝承

文種、伍子胥は春秋時代の人物である。当時の紹興地方は、水害を克服する能力が低く、水利環境がまだ整っていなかった。特に、春秋時代における海のイメージは、上で紹介した明代における北部の海と全く違ったものであり、南部山麓から見ると潮につかった沼沢地が一面に広がっていた。

紀元前5世紀、越王句踐が即位した当初、都城を南の会稽山の内部から山麓の沖積平野の近くにある平陽へ移し、そして、さらに中部の沼沢平原へと移動しようとした<sup>15</sup>。平陽は紹興南部に位置し、現在の平水鎮のことである。紹興の言い伝えによると、平水という地名は既に紹介したように、潮汐がずっと山間部まで進んできてちょうど平水のあたりで止まったこと、あるいは海面がこのあたりの標高と一致したことから、そこを平水と名づけたと伝えている。したがって、越国は潮につかっている沼沢平原が広がっており、沼沢地を開拓するためには、高潮を防ぐのがまず先決であった。文種や伍子胥にまつわる信仰はまさにその時代を背景に出現したものであろう。

紹興で海神とされるのは文種と伍子胥である。文種は退潮（引き潮）神あるいは後潮神で、伍子胥は漲潮（満ち潮）神あるいは前潮神であると言われている。また、別の言い伝えもある。

銭塘江でおこる大逆流には前後二回の潮の満ち引きという現象がある。その一回目の潮（前潮）は伍子胥で、二回目の潮（後潮）は文種であるという。

文種は楚国の人で後に越国の謀臣となり、句踐を助けて呉国を滅ぼした。呉国が滅亡してから句踐は文種を殺した。『越絶書』（巻八）によれば、紹興に種山という山があり、そこは句踐が文種を埋葬した場所であった。『呉越春秋』には、越王は文種に剣を渡し自殺させ、西山（種山）に文種を埋葬した、と語られている。文種の墓は紹興の臥龍山に今も存在している。「高潮が越国の山までに至り、文種の死体は行方不明になった」という記録がある<sup>16</sup>。『呉越春秋』の中にも、次のような話がある。文種が死んで一年ほど経ったとき、すでに潮神になっていた伍子胥は文種の死体を、海へ連れ去って行った。後ほど、二人の死体が海の上に浮かんできた。伍子胥が文種を恨み、海からやってきて文種の死体を奪ったのである。このような文献の記事から、山中に埋葬された文種が海や潮と関係する由来をうかがうことができる。

文種は後に范蠡と並んで紹興の最も立派な土地神となり、地元の人々に深く信仰されている（阮慶詳 1984:175）。しかし、そのような信仰に反して、紹興では文種が引き潮の神として祀られる形跡は見られないようである。それはなぜであろうか。高潮を退治することは土地を守ることと同様であるので、人びとが、引き潮の神の文種を土地神にした、という解釈も考えられる。筆者の管見によると、文種より伍子胥の方が海潮神の性格が強く伝わっている。

伍子胥は楚国の人、呉国の王である夫差の謀臣である。後に、奸臣の讒言と越国の謀略で夫差と対立し、夫差はついに伍子胥に剣をあたえて自害させた。後漢の『越絶書』（巻十四）に、次のような話がある。伍子胥は自害する前に、「私の頭を高いところに置け。越国が呉国に侵入し、王の夫差が捕まるのを見とどけよう。私を深い江に投げこめば、呉が滅ぼされるのを止めることができるだろう」と言った。そして、夫差が人を使い伍子胥の死体を海に投げた時、高潮が奔馬のような勢いでおこり、「後世称述，蓋子胥水仙也」というように水仙神になったようである。

大林太良は「旧暦 8 月 18 日，浙江潮の起源伝承の基礎には，海と山の対立にあって高潮が生ずるという観念があり，この観念はまた日本の海幸山幸にも存在している」と述べた（大林 1975:261-283）。この説が正解かどうかは別として、少なくとも呉越対立という歴史事実が引き潮と満ち潮との対立の形で伝えられている、ということがわかる。このような対立はその後の文種と伍子胥に対する信仰からも見られる。文種は人々の暮らしを守る土地神になったのに反し、伍子胥は次に述べるように凶暴な高潮に比喻され、人々に水害を与えてくるものになった。

呉国、つまり現在の蘇州には伍子胥廟のほか子胥門・胥山・胥亭など、伍子胥を記念する歴史遺産が多く残っている。その一方、伍子胥が滅亡させたがった越国の紹興周辺でも、彼を祀る廟や祠が存在している。紹興には子胥廟があり、『越輜採風録』（光緒刻本）に子胥廟碑の碑文が収録されている。杭州では呉山に伍公祠がある。明・張岱『西湖尋夢』の「伍公祠」によると、宋の嘉祐・熙寧時代、高潮の被害がひどく、伍子胥への慰霊を行った後、その勢いがたちまち弱くなったのでこの伍公祠が建てられたという。そのほか、浙江省の山間部にある建德県には、



子胥渡・子胥亭・子胥廟などがある。

しかしながら、これらの伍子胥に関わる廟や記念物はその背景がそれぞれ異なっていると考えられる。例えば、蘇州の場合は当然、彼の呉国に対する忠誠心を世に伝えようという記念物的性格が背景にある。そして、伍子胥が楚国から逃げ出し呉国に行く途中で建徳県を通過したことがり、その記念として彼に関わるものを残してきたと言われている。ここでは、伍子胥の歴史人物としてのイメージが強いといえる。

しかし、杭州湾に面する紹興と杭州では上記と違って、彼を信仰する背景としては、伍子胥の潮神としての性格がある。紹興、特に銭塘江の一带は「浙江夜潮声、云是子胥潮」というように、銭塘潮を「子胥潮」と呼んでおり、凶暴な銭塘潮の成因が伍子胥によるものだと伝えられている。また、この「子胥潮」は越国に復讐するために、あるいは越国を滅亡させるために起こったという。それゆえに、「子胥潮」に襲われた銭塘江に沿った地域の人々は、彼を祀る廟や祠を造り、被害を防ぐために信仰しているのである。

紹興地方の人びとが伍子胥神を信仰する理由は簡単ではない。先に言及した紹興にある子胥廟碑の碑文に、彼の忠誠心と境遇に同情するという言葉が書かれている。このように彼を歴史人物として見ている知識人の行為は、次に紹介する曹娥江の人々が伍子胥を悪の潮神にし、自分の生活を守るために彼を信仰する行為と決して同じではない。

## 2) 伍子胥への人身御供としての曹娥

水害を防ぐために、水神への犠牲が必要であるということは、古くから伝えられている。例えば、黄河流域における「河伯娶妻」の話はまさにそれである。「黄河の神の河伯に妻をめとらせなければ、水を氾濫させ村人を溺れさす」という言い伝えがある。それは、毎年、決まった日に、巫祝が村の美しい娘を探しだし、彼女に一連の儀式をさせた後、河伯の妻になるために黄河に投じたという。巫祝の登場及び一連の儀式は美女を水神への犠牲にする過程である。それでは、紹興地域では悪の潮神伍子胥のため犠牲となる者はだれなのか。それは女性の曹娥がその役目を果していると考えられる。

上虞は紹興の東部に位置している。有名な「虞舜が丹朱の乱を避けた地」という神話により、「上虞」と名付けられたと言われている。上虞を南北に貫通した曹娥江は杭州湾の潮の影響が強い川である。その曹娥江に面して「江南第一廟」と言われている曹娥廟が建てられている。

曹娥廟で保存している一枚の曹娥碑に、後漢の上虞県令度尚の「曹娥碑碑文」が刻まれており、内容は次の通りである。

曹娥は、曹盱の娘である。曹盱は歌舞が得意で、神を楽しませることができた（撫節按歌婆娑楽神）。漢安二年五月（143年）のある日に、伍君神（伍子胥）を迎えるために逆流に向かい進み、水に溺れて死んだ。その死体は見つからなかった。十四歳の曹娥は大声で泣き叫び、17日間も父の死体を探し続けたが見つめることはできなかった。とうとう自分も曹娥江に入水した。五日後、曹娥の死体は父の死体を抱くようにして川から出てきた。

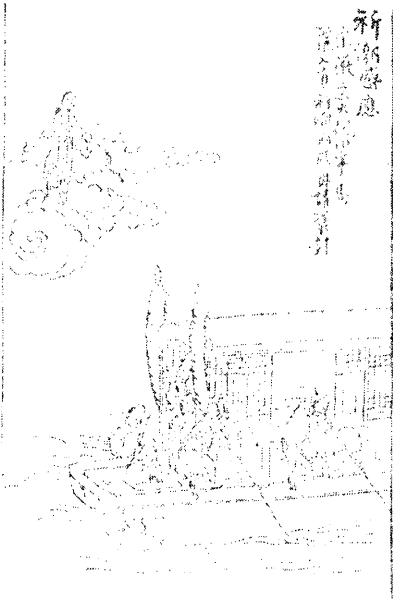
漢恒帝元嘉元年（151年）、度尚は朝廷に曹娥のことを報告し、曹娥は孝女として認められ、曹娥廟の建造が始められた。曹娥は『二十四孝』（元の時代の作と言われている）には入っていないが、宋遼金元時代の二十四孝図の登場頻度を見ると、曹娥を含めた24人の孝行人物がすでに定着している（江玉祥 2001:239）。

では、孝女としての曹娥をあつかう紹興地方では水神としての曹娥信仰とはどのようなものであろうか。まず、曹娥の水神としての性格を確認しておこう。曹娥廟正殿の両方の壁に、曹娥の生前死後に関する42枚の壁画が描かれている。その中の4枚は潮汐と関わったものである（図6）。第一は、宋徽宗大観4年（1110年）、高麗が航路安全のために潮神を祈祷し、無事に皇帝に貢ぎ物を捧げたので、靈孝夫人のおくり名を贈った（「祈潮感応」という壁画）というもの。第二は、宋徽宗政和5年（1115年）、高麗からの貢女（皇帝に奉げる女性）が曹娥を参拝し旅の無事を願って、その後皇帝に寵愛されるようになったので、昭順夫人のおくり名を贈った（「高麗謁廟」という壁画）というもの。第三は、宋孝宗淳熙元年（1180）、王子魏王が明州（現在は寧波）に赴任する途中で、潮神を祈祷し無事であった（「祈潮再応」という壁画）というもの。第四は、咸豊11年（1861年）、海賊が浙江に侵入した時、曹娥神のおかげで、潮によってそれを阻止した（「神風拒賊」という壁画）というものである。

四つの話の主題は基本的に、曹娥を参拝することによって高潮が防げ航路の安全も守られ、さらに、敵に対しては逆に高潮をおこすことができるというものである。曹娥廟の周辺には、潮が曹娥廟の前を通過する時は必ずその勢いをひかえて低くなり、通過した後はまた暴れて激しくなるという言い伝えがある。「潮魂」（伍子胥と文種の靈魂）は裸であるので、女の曹娥に見られないように、頭を下げて身を隠しているという。『曹娥廟志』（光緒刻本）には曹娥は雨を降らせたり、止ませるという話もある。上虞地方が二年連続干ばつに襲われた時、孟嘗という人物が曹娥を祭祀したところ、たちまち大雨が降ってきたという。また、清の嘉慶7年7月に淫雨で曹娥江の水勢が激しくなったが、曹娥神を祈祷するとすぐに風や雨が止んだという。

以上の曹娥に関する伝承によれば、曹娥は、水神として水害や干ばつを防ぐことができ、そして水運の面は、潮を順流させてくれて、敵に対しては潮を逆流させ激しくすることもできる。また、『湖広誌書・雲夢県』には、5月5日の賽龍舟の時に、忠臣屈原、游江女神曹娥、及び濇司水神の像を御輿にのせて行進しているという記録がある。この記録からは、紹興以外の地域（湖北地方）で水神曹娥を信仰していることがわかる。ここまでで確認できることは、曹娥信仰は孝行の曹娥に対するものではなく、水神としての曹娥に対するものであるということである。曹娥に対しては、歴史上の人物としての孝女である曹娥と、神としての水神の性格を分けて考える必要がある。

清・黄宗羲の詩「観虞邑賽神」に、「吹簫邀鳳女、乗馬看桑王」という文言がある（上虞県地方志編纂委員会 1990:859）。曹娥廟の近くにある鳳鳴山に鳳鳴真人祠があり、曹娥の父が鳳鳴山真人に祈ってから、曹娥が生まれたという伝説を伝えているが、鳳女は曹娥のことを指している。直江広治は、収穫祭は「賽神」（神々に詣でる）と呼ばれ、土地神を中心として営まれ春と



1, 祈潮感応



2, 高麗謁廟



3, 祈潮再応



4, 神風拒賊

(図6:曹娥廟の壁画)

秋に行なわれたと指摘した(1967:143-144)。善行の水神である曹娥は、高潮被害に襲われた地方を守る地方神としての性格も付与されたようである。

次に、伍子胥の鎮魂の祭祀に関して、民間伝承から見てみよう。伍子胥の鎮魂のために逆流を迎える儀礼に関する史料は、後漢時代の曹娥の物語しかないようである。曹娥に関する物語は数多くの古文献、例えば、『古文苑』、『列女伝』、『水経注』、『異苑』、『後漢書』、『会稽典録』などに記録されている。これらの曹娥に関する歴史文献には、曹娥の父親である曹盱の巫祝の身分、伍子胥に関する呼び方、潮神を迎える祭の期日などについて異なる記録がみられる(福本1998, 下見1999)。例えば、曹盱が巫や巫祝であるとしたり、「迎伍君」だけではなく、「迎伍君神」、「迎江神」、「迎婆娑神」、「迎波神」などとしたり、漢安二年五月だけではなく漢安二年のみであったり、そして漢安二年の次に五月五日、午日、端午などとしたりしている。ただし、異なるものも見られるが、その内容はほぼ同じである。

歴史文献の記録は相互に引用しあった痕跡が考えられる。紹興の地方文献は地元の知識人が作った場合が多く、しかも正史を参考にしたこともあるかもしれない。いずれにしても、「迎伍君神」、「迎江神」、「迎婆娑神」、「迎波神」という言葉を、逆流を迎える伍子胥の鎮魂礼として捉えている。しかし、曹娥江に沿って住んでいる曹娥郷の人びとの間に伝承されている曹娥伝説によると、曹盱は巫祝ではなく普通の漁師であり、5月5日ではなくある年の春と夏の間に、魚とりに行った時に溺死したという(上虞県民間文学集成辦公室1989:33-35)。伍子胥の祭祀については、まったく言及されていない。また、このように語られている伝説と聞き取りによれば、伍子胥の祭祀と漁師たちの漁業伝承には関わりがあったことがわかる。

曹娥江の漁師の間には「接潮頭」(「接潮」ともいう)という用語がある。大潮が来ると海に出た漁師たちが、逆流の潮に向かって進むことを意味する<sup>17</sup>。春と夏の季節は、銭塘江の逆流の時期であり、大潮が魚を多く巻き込んでくるので、大漁の漁期でもある。大潮が来る時に海に出る目的は大漁のほかに、もう一つある。それは毎年、大潮の時に潮位の高さを記録することである。かつて曹娥江のある場所に、「指潮石」と呼ばれる潮位を表示する石が設置されており、毎年大潮の高さを石に刻まなければならなかった。これは防波堤の建造や修復の基準となり、極めて重要なことであった。曹娥郷では潮位を石に刻むことを「刻潮度」といい、曹娥の父親曹盱が「刻潮度」の時に亡くなったというもう一つの話も伝えられている。大潮を迎えながら船を進めることは、曹娥江に沿って暮らしている人びとにとって日常的なことであった。

伍子胥は潮の神とされており、前述したように、大潮や高潮は伍子胥の復讐として起こるものであるという言い伝えが存在している。それゆえに、伍子胥のことを「潮」、「潮神」などと呼んでいる。つまり潮は伍子胥の代名詞でもある。先の「接潮頭」は「接潮神」、「迎潮神」、「鬪潮神」という言い方もされる。このように考えると、曹娥碑の碑文に書いてある「迎伍君」、あるいは曹娥の物語に関する歴史文献の中に、よく出現する「迎伍君神」、「迎江神」、「迎婆娑神」、「迎波神」なども、おそらく先に紹介した「接潮頭」と関連があると考えられる。要するに、曹娥江の漁民にとって、逆流を迎えることはその時期の大漁のために行われる普通の漁業

伝承として表出している可能性もある。

ただし、「接潮頭」は伍子胥の鎮魂と非常に密接な関わりをもっている。「接潮頭」は漁業伝承であるが、これに伴って伍子胥の鎮魂も行われていたのである。逆流を迎えることを「鬪潮神」というが、それは潮神、つまり伍子胥と鬪うことである。さらに「接潮頭」のように大潮に襲われる危険に伴う漁業伝承はもう一つある。「搶潮頭魚」という魚獲りの方法である。

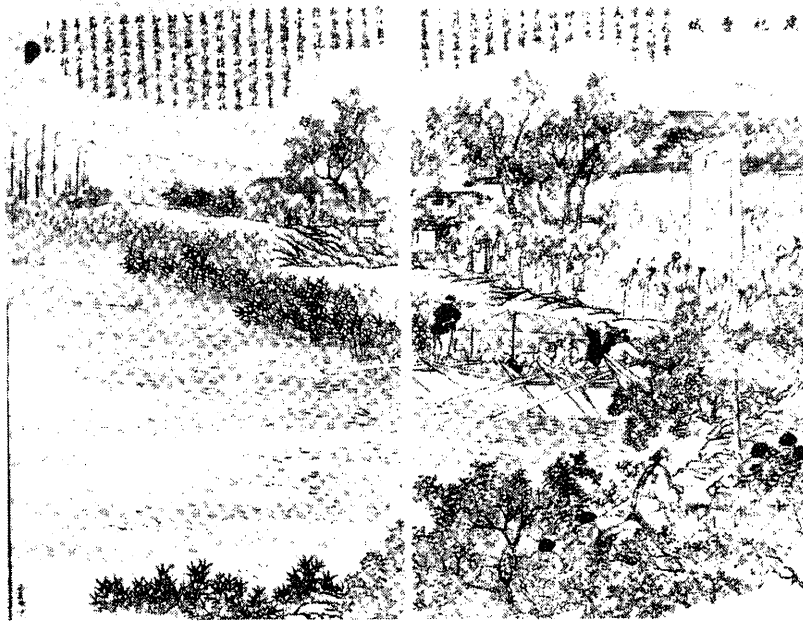
「搶潮頭魚」は潮の干満を利用して行うすくい網漁であり、曹娥江のほとりの多くの漁民はこの漁法を心得ていた。まず、魚とりの網を持ちながら、干潟の前の海水で潮を待つ。そして潮が近づいたらすぐに、潮に溺れないように防波堤の方向へ斜めに走り出す。潮をよく見ながら走り、潮の中に魚があれば、すみやかに網で魚を捕る。斜めに走ることは潮の衝撃を弱くするためである。この漁法は小潮の場合に相応しいが、腕自慢の漁民は大潮の時でもする。紹興北部にある馬鞍鎮湖山村での聞き取りによれば、「搶潮頭魚」は1960年代まで村の若者がやっていて、魚とりというより潮遊びの一つだったという。

以下に紹介する「観潮」もこのような潮遊びである。これらの潮遊びは潮と鬪う姿を表わし、まさに「鬪潮神」そのものである。そうした日常的「鬪潮神」は伍子胥に対する鎮魂でもあるのである。

さらに、旧暦8月18日の「観潮節」に伍子胥の鎮魂の祭祀があったようである。この日は潮神の誕生日、あるいは伍子胥が文種の死体を奪った日であると伝えられている。毎年、8月中旬、潮の落差が増大するとともに錢塘江の流量も多くなり、河川に海が流れ込んで壮大な錢塘江の大逆流が形成される。三江口では、「古い時代、漁民が船倉の中で潮を迎えるための祭祀を行い、「接潮頭」と呼んでいた」（紹興市地方志編纂委員会 1996:2890）という。ここでの「接潮頭」は祭祀のように見える。また、この日の観潮の際に、「弄潮」と呼ばれる波乗りの曲技も披露される（裘士雄他 1990:262）。「弄潮」は潮神を鎮めることと関係していると言われている。

いままでの入手した地方文献及び現地調査によれば、上虞には伍子胥の廟や祠が存在していなかったことがわかる。また、『夢梁録』（巻4、観潮）によると、毎年8月中旬に、潮神を迎えるための祭祀が行われたが、後世になって、その中心になったのは錢塘江に位置する都市、杭州であるという。曹娥がなくなった後、曹娥江で伍子胥神を迎える儀礼に関する記録はないようである。そのかわり、立派な曹娥廟が建てられ、盛大な祭りも行われるようになった（図7）。

そして、曹娥の場合は、歴代における朝廷や地方行政が彼女の孝行という善行を高揚しようとしてきたので、民間においても孝女というイメージが強くなり、水神としての性格が忘れられていった。紹興の治水は唐代になると、大規模な防波堤が建造され、その大部分は曹娥江の江口の沿岸地帯にあった（車越橋他 2001:125-128）。また、明代には三江閘門が完成し、こうした防波堤や閘門などの水利施設によって、潮による被害は少なくなった。そういった過程で、人身御供のイメージが強かった水神の曹娥は、親孝行をする孝女のイメージに変化してきたとも考えられる。



(図7:曹娥の祭祀)

## 五. おわりに

以上、紹興地方における高潮を中心とした水害をめぐる伝承を事例にもとづいて、人びとの水害へのイメージ、水害に対する心意的対応を考察してきた。

高潮の原因になるものは人間の墮落、東海龍王などが挙げられるが、地域的には伍子胥の文種、西施に対する復讐もその一つになっている。また、高潮被害を具体的に表現するために、一面の海が広がっていた大昔の紹興の様子を常に語っている。さらに、高潮の被害から逃れられない人びとは、高潮を制御することができる特異な能力をもつ人物を求めていた。治水に携わった地方官や水害でなくなった歴史人物を神様に仕立て上げるのも、このような心理である。

高潮への心意的対応としては、潮の神を創造することが多かった。治水や水害によって犠牲になった歴史人物を神様にし、彼らを祀る廟を造って信仰する例が多く見られる。また、信仰する場所は、治水に関わる場合はその水利設備の傍らにし、水害に関わる場合は亡くなった場所のわきにするのが普通である。さらに、歴史人物を神に仕立て上げたとき、彼らを祀る廟を造って信仰することのほかに、彼らに関する伝説が語り伝えられる。伝説によるとこれらの神の性格は、生来のものであったり、特異な力を持っていたり、人身御供のように神秘さを漂わせていたりする。湯紹恩と曹娥をめぐる伝承はその傾向が顕著である。

このように洪水神をめぐる伝承には、犠牲になる人物がよく登場している。犠牲にされた人は水神となり、治水工事を完成させ、被害を防ぐことになる。特に、明の湯紹恩及び三江閘門造りをめぐって、人身御供のような伝承が多く見られ、何人もの歴史人物が神として登場した。明の時代の災害記録と三江口の潮による被害を考えると、これは決して不思議ではない。歴史記録の問題があるが、明の時代、高潮の災害は多かった。紹興における晋から清までの台風の記録によれば、35回の中に17回は明の時代のものである（車越喬他 2001:51-52）。紹興では歴史上の台風は、いつも防波堤を破壊し高潮を起こしている。そして明の時代になり、三江口の問題が解決されたことによって、紹興の土地、河川、そして人びとが、潮による被害から救われるようになったのである。

善のイメージの龍神と悪のイメージの龍神という二つの龍の性格と同様、紹興地方における潮の神も、悪の神としての伍子胥と善の神としての文種、曹娥が表現されている。高潮を防ぐために海辺の人々は悪の潮神伍子胥を祀っていたが、後になって、人身御供の性格をもっている善の潮神曹娥が現れ、伍子胥への信仰から曹娥への信仰に代わり、曹娥を祀ることになり、高潮をよりコントロールしようとしたのである。

歴代の治水により、潮による水害は少なくなった。本論で取り上げた潮の神も地域住民の生活の守護神、招福神へと変化している。水害が多い時代には、水害を防ぐために水神を祀ることが必要とされていたが、水利開発によって平和な生活ができる現在においては、災害の意識が薄くなり、日常の生活を守る、あるいはさらに福を招くための信仰に変化してきたのかもしれない。

## 引用・参考文献

### 中国語文献

- 車越喬他 2001 『紹興歴史地理』 上海書店出版社  
陳鵬兇他 1991 「春秋紹興水利初探」『鑒湖與紹興水利』 中国書店  
陳橋驛 1999 『吳越文化論叢』 中華書局  
鄧雲特 1998 『中国救荒史』 三聯書店  
顧頡剛 1981 「禹是南方民族の神話人物」『中国神話学文論選萃』 学苑出版社  
悔堂老人（清） 1983 『越中雜識』 浙江省人民出版社  
冀朝鼎 1981 『中国歴史上的基本経済区与水利事業的發展』 中国社会科学出版社  
江玉祥 2001 「元刊『二十四孝』之蠱測」『中華孝道文化』 巴蜀書社  
樂祖謀 1988 「歴史時期寧紹平原城市的起源」『中国歴史地理論叢』（1988年第3輯）  
裘士雄他 1998 『紹興的中国之最』 浙江攝影出版社  
邱志榮 2002 『鑒水流長』 新華出版社  
紹興市地方志編纂委員会 1996 『紹興市志』 浙江人民出版社

紹興市民間文学集成弁公室 1989 『紹興市故事巻』(上) 中国民間文芸出版社  
紹興市文聯 1997 『紹興百俗図賛』 百花文芸出版社  
紹興県地方志編纂委員 1999 『紹興県志』 中華書局  
紹興県民間文学集成工作小組 1989 『紹興県故事巻』 浙江民間文学集成弁公室  
上虞県地方志編纂委員会 1990 『上虞県志』 浙江省人民出版社  
盛鴻郎 1991 『鑑湖与紹興水利』 中国書店  
王水 1995 「江南水神与水祭民俗」『中国民間文化』(1995年第2集) 学林出版社  
姚漢源 1991 「序」『鑑湖與紹興水利』 中国書店  
阮慶祥他 1985 『紹興風俗簡誌』 紹興市・県文聯  
張能耿他 1995 『越中覽勝』 国際文化出版公司  
中華人民共和国水利部 1999 『中国'98大洪水』 中国水利水電出版社  
周魁一他 1991 「古鑑湖の興廢及其歴史教訓」『鑑湖与紹興水利』 中華書店  
(なお、本論で引用している地方文献は、紹興図書館と上虞図書館が所蔵している。)

#### 日本語文献

福本雅一 1998 「孝女曹娥碑をめぐって」『学林』第二十八・二十九号  
胡鞍鋼 2001 「生態環境破壊の抑止こそ急務」『世界』2001年3月号(第685号) 岩波書店  
大林太良 1975 『神話と神話学』 大和書房  
直江広治 1967 『中国の民俗学』 岩崎美術社  
野本寛一 1996 「総説 環境の民俗」『環境の民俗』(講座日本の民俗学4) 雄山閣  
下見隆雄 1999 「曹娥の伝記説話について」『中国研究集刊』25号  
富山和子 1987 『日本再発見 水の旅』 文藝春秋

#### 図, 写真

##### 図

図1:紹興地図 (<http://www.map168.com/zj/sx/sxxxzq/sxxxzq.html>により作成)  
図2:春秋時代の紹興城(紹興市地方志編纂委員会 1996)  
図3:後漢永和時代以前の紹興水系(車越喬他 2001:120)  
図4:鑑湖完成した後の紹興水系(車越喬他 2001:123)  
図5:三江閘門の傍らにある湯公祠(紹興県地方志編纂委員 1999:445)  
図6:曹娥廟の壁画(『曹娥孝女廟志』)  
図7:曹娥の祭祀(『点石斎画報』)

##### 写真

写真1:1930年の三江閘門(紹興図書館が所蔵している)  
写真2:現在の三江閘門(紹興県地方志編纂委員 1999)  
写真3:現在の曹娥江(2002年、筆者が撮影した)



## 注

- 1 『中国救荒史』の再版をはじめ、中国では次の通り、災害に関する著書や論考が発表された。例えば、孟昭華『中国災荒史記』（中国社会科学出版社、1999年）、邱国珍『三千年天災』（江西高校出版社、1998年）、王振忠『近600年来自然灾害與福州社会』（福建人民出版社、1996年）などの著書がある。論文については、王振忠「歴史自然災害與民間信仰」（『復旦学報』社会科学版、1996年第2期）、邹逸麟「“災害與社会”研究刍議」（『復旦学報』社会科学版、2000年第6期）、満志敏「光緒三年北方大害的氣候背景」（『復旦学報』社会科学版、2000年第6期）、江沛「二十世紀三四十年代華北区域的災害與農村社会變動」（『中国社会歴史評論』第三卷、中華書局、2001年第6期）などである。
- 2 紹興については、紹興古城、紹興県、紹興市などの呼び方がある。大きく区別すると、2500年の歴史をもつ紹興古城は、いまの紹興市越城区にあたり、また紹興県は歴史上の山陰県と会稽県の両県の範囲であり、紹興市は越城区、紹興県、上虞市、諸暨市、嵊州市、新昌市を管轄する行政区域である。本論では、歴史上の山陰県と会稽県の両県及び上虞市の沿海部（歴史上、紹興地域に属する）を中心としている。したがって、本論でいう紹興南部山地、中部平原、北部の沿海部は、歴史上の山陰県と会稽県の両県の範囲内でのことである。
- 3 紹興をベニスに喩えている言葉は、『Nagel's Encyclopedia Guide—China,P.1090』に記載してあるフランスの宣教師Groslerの記述による。陳橋驛（1999:515）から引用した。
- 4 『管仲』（水地第三十九）による。なお、日本語の訳文は、遠藤哲夫著、新釈漢文大系42『管子・中巻』（明治書院、1989年）を参照。
- 5 「瀝海」伝説は「東京城坍塌」（東京城が崩れた）伝説ともいう。
- 6 劉宋時代（429—478年）の会稽太守である孔靈符（?-465年）の『会稽記』による。孔靈符の『会稽記』は現存しないため、その一部が『太平御覧』などに収められている。
- 7 「沿湖開水門六十九所」『水経注・漸江水』。
- 8 「越州鑑湖図序」『曾鞏集卷第十三』と「復鑑湖議」『嘉泰会稽志卷十三』による（鑑湖は鑿湖の古い書き方である）。
- 9 この例は潮汐が紹興南部の山地まで上がっていたことを示している、という説もある（周魁一他 1991:39）。
- 10 曾厚章「郡守篤齋湯公伝略」『越祠紀略』（共和印書局、1920）
- 11 清・悔堂老人の『越中雜識』によれば、湯公祠は二つある。一つは三江閘にあり、もう一つは開元寺にある。『康熙会稽県志』（巻14祠祀志上・廟）には、ただ開元寺の湯公祠しか書いていない。また、上虞県曹娥郷には湯公祠がある。
- 12 「張神廟」『康熙会稽県志』（巻14祠祀志上・廟）、曾厚章「張神伝略」『越祠紀略』（共和印書局、1920）
- 13 「股堰廟二十四韻」『越声』（民国抄本）
- 14 そのほかに、1931年前後、紹興の地方神である「黄老相公」を財神として祭ることもあった。

『紹興市志』（第五冊，1996:2921）は「黄老相当張神菩薩看（錯看財神）」という言い伝えを紹介している。

15 清・毛奇齡「重修平陽寺大殿募疏」『西河文集』卷16。

16 『乾隆紹興府志』は『輿地志』から引用した。

17 接潮は海運の用語としても使用しているようであり，大潮に出あったら，大潮に向かってゆっくり進むという意味である。

#### 新刊紹介

宮崎正弘著

### 『出身地でわかる中国人』

日本では，関西人や関東人などその出身地方によって人々の気質や性格が違うということがよく言われるが，お隣の中国でも，北京では政治について語る人が多く上海は人々は国内政治より海外志向というように，出身地方によって人々の気質や性格が違うのだという。これは，日本の約26倍という広大な国土と10倍以上の人口を抱える中国の事情を考えると当然のことなのかもしれない。

本書は，そのタイトルからもわかるように，中国における各地方の人々の特質について論じられている。また，現代中国には沿海部を中心に五つの経済圏があってそれぞれが求心力となって文化圏さえ分かれつつあるとして，各経済圏の特色についての説明も書かれている。構成は，序章・1～10

章・終章と12の章に分けられていて，経済圏ごとに一章にまとめてそれぞれに付随する省の人々の特質について論じる形式となっている。省の中でも地区によっていくつかの特質に分かれている場合はそれぞれについて詳しく論じられている。また，内陸部の省や儒教・イスラム教など宗教と関わりの深い省，海外華僑や近年の一人っ子政策の影響を受けて育った新人類と呼ばれる若者についてもそれぞれを一章にまとめて論じている。

中国の民俗文化について研究する際，その研究対象地域の人々の気質や性格などを理解するためにも本書はぜひ読んでおきたい一冊である。

（高倉健一）

2006年1月刊 P H P 研究所